

第33回 三遠南信サミット2025 in 南信州

住民セッション 報告書

1. テーマ

人口減少時代の県境を越えた三遠南信地域の交流・連携と関係人口(ファン)づくり

2. 開催趣旨

2025年度の三遠南信サミットは、「人口減少」を地域共通の課題として捉え、県境を越えた広域連携の重要性を改めて認識したうえで、サミットテーマを「人口減少時代の広域連携～持続的に成長する地域の創生～」と掲げ、人口減少時代における広域連携について、特に「インフラ」、「地域産業」、「観光」の側面から議論する場となっている。

住民団体レベルでの三遠南信地域の県境を越えた交流・連携活動は、長年にわたって行われてきたが、コロナ禍を経て新しい交流のあり方や地域づくり活動に対応していくことが重要となる。

そこで、今回の住民セッションでは、「三遠南信道の整備」「伝統産業の再興」「集落存続と山村留学」をキーワードに、人口減少時代における地域住民主体の新しい県境を越えた交流・連携と関係人口(ファン)づくりについて考える。

3. 日時

2025年10月6日(月) 10:00～12:00

4. 会場

丘の上結いスクエア 2階 ムトスぷらざ多目的ホール

5. 概要

三遠南信道の整備を見据えた県境を越えた交流・連携活動に取り組む団体関係者に活動について事例報告が行われ、伝統産業の再興と親子山村留学移住者の受け入れ活動に取り組む2名から話題が提供された。最後に県境を越えた交流・連携と関係人口づくりについて意見を交わした。

プログラム

開会あいさつ

代表世人

吉田 弓

趣旨説明

事務局

平川雄一

事例報告

くにぎかい

国境を越えた「山大国」の交流—三遠南信道青崩峠トンネル(仮称)の開通を見据えて—

遠山郷・奥山郷「山大国」連携交流倶楽部

酒井郁雄氏、鈴木志保氏(以上、飯田市南信濃)

神川靖子氏、鈴木清孝氏(以上、浜松市天竜区)

話題提供

遠山郷の藤系文化の伝承活動と交流について

木下美奈子氏(遠山ふじ系伝承の会)

和合小学校PTA山村留学実行委員会が取り組む山村留学の特色

小掠純子氏(和合小学校PTA内親子山村留学実行委員会)

6. 住民セッション要旨

(1) 事例報告

くにごかい 國境を越えた「山大国」の交流 —三遠南信道青崩峠トンネル(仮称)の開通を見据えて—

遠山郷・奥山郷「山大国」連携交流倶楽部

- ・かつて遠山一族が治めていた飯田市南信濃および上村の 2 地区の遠山郷と奥山氏が治めていた浜松市天竜区水窪町地区の奥山郷は、青崩峠を「青崩峠」を挟んだ南信州と北遠の秋葉街道沿いの地域である。
- ・両地区ともに「地域面積の 90%以上が森林」「林業を中心に山の恵みが住民の暮らしを支えてきた」「貴重な民俗芸能が継承されている」「独自の生活文化が残されている」「住民エネルギーが高く、元気である」などの山間地域の共通の特徴を持つことから「山大国」と名付けた。
- ・秋葉街道（塩の道）を通じた文化や経済の交流、婚姻関係での相互交流、双方の商工会の交流、野球や地域イベントへの参加、双方の役場・議会の交流など参加に交流活動が行われている。
- ・2023 年に地元新聞社が企画した座談会に南信濃地区と水窪地区の双方の住民が参加し、意気投合した住民同士が「三遠南信自動車道の開通前に、より一層交流する機会を創りたい」という思いから市民団体を発足した。
- ・2024 年 6 月、南信濃にて第 1 回交流会を開催し、婚姻で遠山に住む水窪出身者からの出席・発言があったり、三遠南信道青崩峠トンネル開通後に向けた意見交換や焼き肉交流会を行った。
- ・翌年 6 月は水窪にて第 2 回交流会を開催し、高根城跡を散策した。奥山衆雑兵の待ち伏せや口上（寸劇）などして親交を深めた。
- ・また、三遠南信道の開通を見据えた地域振興を考える集いを開催し、勉強会や住民同士の交流の場を設けた。
- ・山大国連携交流事業は、「地域力を高めるために地域の特色を生かして、親しく交流していく」「地域住民や様々な団体などとの連携を図りながら、住民相互の交流を拡げ、相互の理解を深めながら、地域内外のネットワーク・仲間づくりを進める」「遠山と奥山の魅力を再発見して幅広い世代



遠山奥山郷・信州遠山郷国境案内之図



高根城本丸へ向かう参加者のみなさん

の交流につなげ、関係人口の増加につなげる活動を展開する」「賑やかに、楽しく、愉快地に活動する」ことを目指す。

- ・「三遠南信自動車道」や「三遠南信交流」などに使われる「三遠南信」という名称はどちらかというと堅い名称であり、親しみやすい愛称（名前）にしてはどうかと提案された。



城を守る雑兵たちが出迎える

(2) 話題提供

和合小学校 PTA 山村留学実行委員会が取り組む山村留学の特色

小掠純子（和合小学校 PTA 内親子山村留学実行委員会）

- ・和合地区は、阿南町の南部に位置し深い山々に囲まれた地域で、そこに小規模校の和合小学校がある。
- ・2025 年度の和合小学校の総児童数は 5 名で、山村留学により学校が維持されている。
- ・少子化による児童の減少を受け、学校を存続させるために当時の移住者が声を上げ、一定期間ならば親子で移住してもらえるのではないかと思いつき、親子で山村留学に参加してもらうことにした。
- ・すぐに学校と相談して PTA 山村留学実行委員会を起ち上げた。
- ・和合地区の移住者が中心となって運営していくこともあり、全戸が PTA 会員である住民のみなさんに理解と協力を得ることから始めた。
- ・実行委員会の具体的な活動は、まず広報することになり、東京や名古屋の移住相談センターにお願いに行った。ほぼ手弁当で活動した。
- ・2017 年度から親子山村留学を実施することになり、学校見学、体験入学受け入れ、住まいの斡旋、近所付き合いの仕方への助言、地域行事への参加の呼びかけ、農作業希望者の手伝いなどをすべて住民有志によって行うことになった。
- ・親子山村留学に参加した子どもたちは、どんどん元気に輝いており、児童会長を全員一度は景観することで自分の力を発揮する場面が多くあり自信をつけていった。



動画による PR 活動



和合小学校と和合公民館の合同運動会



地域の人が稲作体験などを指導する

- ・和合の地域性に惹かれる親が集まり、年間行事、伝統行事などにも積極的に関わる。
- ・自然に助け合い、和合に来て良かったという思いをベースに、次につなげていく活動や宣伝を自主的にやるようになっていった。
- ・2025 年度は親子山村留学の PR 動画も有志で製作して動画共有サイトで情報発信を始めた。
- ・9 年の間に、12 家族が和合で暮らし、現在は 5 家族がいる。和合を卒業して離れていった人たちともつながっており、交流が続いている。

遠山郷の藤糸文化の伝承活動と交流について

木下美奈子（遠山ふじ糸伝承の会）

- ・遠山ふじ糸伝承の会は、2015 年に発足し活動は 10 年目になる。
- ・昔ながらの工法で、藤糸を紡ぎ、作品にしたり、藤糸作りの工程を学ぶ体験をはじめ、藤糸を使った織物やストラップ編み、また、自然のツルを取ってきて、カゴ編みをするワークショップを実施している。
- ・藤織りの文化は日本の北海道、沖縄以外多くの山間部にあった文化で、特に、綿花の普及が遅かった地域などには、昭和初期まで残っていた。身近なところで諏訪大社の御柱を引くのも昔は藤が使われていた。
- ・三遠南信地域では、天龍村坂部の冬祭り、阿南町新野の雪まつり、浜松市天竜区水窪町の西浦田楽の衣装に藤糸が使われている。
- ・遠山の逸話「藤姫物語」の中で、姫が御礼に紡いでいったとされている山藤の糸に込められた思いを知り、藤織り文化の再興を思い立ち、丹後で藤布の全工程が学べる講習会に通い、技術を身につけた。
- ・その後、地元遠山の人たちの協力のもと、会を発足した。
- ・会発足後、藤糸づくり体験や籠編み・藤織り体験などの体験会を企画し、全国から参加者が集まった。
- ・10 年間で全国から 274 名が参加した。現在の会員は 20 代から 80 代まで 27 名で構成される。
- ・2025 年は、初めてインバウンド観光の対応ができた。
- ・これから三遠南信に点在するさまざまな団体、民俗芸能や食文化など地域の人たちがつながって、継続的に絶やすことのない広域連携モデルが生まれることを期待している。



水窪の藤衣



藤刈り当日の藤剥ぎ



糸紡ぎ

(3) 意見交換会

- ・三遠南信道青崩峠トンネル(仮称)開通を見据えたイベントを通して、遠山郷の住民のみなさんと深く関わるようになったことや、商売の面でも南信州側の施設と取引していることもあり南信州のことに関心を持つようになった。
- ・山村留学でやってきた親御さんはリモートで仕事をしている。和合で就業の場は森林組合と老人福祉施設しかない。遠山郷の小学校も廃校が決まっており、住民も深く関わっていなかったことありとても参考になった。
- ・和合で山村留学を終えた後、そのまま移住するという事例はないが、地元に戻って子どもが自立した後に自分はまた移住したいと思っている親はいる。
- ・その受け入れに対する準備はしているのか。⇒空き家を紹介することはしている。
- ・藤織り体験ツアーは、観光商品になり得るコンテンツで、食事をしたり宿泊したりすることで地域経済に循環が生まれ、地元で関わっているみなさんはやりがいも増してくるので期待したいと思う。
- ・これまで三遠南信サミットには住民として関わってきた。三圏域の各地で活躍する仲間に出会いたいという思いから三遠南信の住民同士が交流を重ねて関係人口づくりを実践してきた。
- ・今回発表された遠山郷と奥山郷の住民の連携交流会のつながりと活動、藤系の伝統文化継承による広域的な交流、和合の親子山村留学の取り組みによって生まれたその後のつながりと交流の継続は、その人たちに魅力があって会いたいという思いからつながりできてきた。
- ・また、新たに人から人へつながっていくことを実感し、それが交流やつながりの輪を広げ、改めて住民同士のつながりこそパワーだと感じることもできた。



会場全体の様子